

# 十字軍研究の動向と立場

前川貞次郎

## I

ヨーロッパやアメリカではかなり古くからさかんに研究され、おそらく最も研究文献の多いものの一つ<sup>1)</sup>であるにもかかわらず、わが国では、ほとんど全くといってよいほど、研究されていない歴史の一分野がある。それは十字軍運動に関する研究分野である<sup>2)</sup>。

外国の流行に敏感なわが国の学界で、ではなぜ、このように十字軍研究が行われないのであろうか。これ自体が一つの研究課題ともいえる。十字軍研究がわが国で不毛な理由は、もちろんいろいろ考えられる。たとえばキリスト教の伝統が浅いこと、しかも明治以後流入したキリスト教が戦闘的性格のものでなかったこと、一方イスラム（回教）については全く知られていなかったといってもよいことなど、宗教的理由もその一因であろう。また十字軍運動の主要舞台となった地域、西南アジア（ヨーロッパ人のいう近東）地域に対するわが国の利害関係が、いままでほとんどなかったこともその一つであろう。（のちにふれるように、ヨーロッパにおける十字軍研究の発展には、この側面をみのがすことができない。）あるいはまた、十字軍が一国だけの運動でなく、いわば全キリスト教世界の運動であり、また同時にイスラムとも関係するものであるだけに、本格的な研究には、語学的にみても、きわめて困難な要素をふくんでいることもその理由の一つであろう。さらに戦後におけるわが国の西洋史学界の傾向が社会・経済史の分野に偏し、宗教的性格を強くもつ十字軍運動に対しては、その重要性をみとめてはおりながら（どの概説的叙述をみても、たとえば十字軍が重大な影響をもつことは強調している）、充分に問題意識を見出しえなかったことにも、その原因を求めることができる。イスラム研究がいままでほとんど行われなかったことはいまさらいうまでもない。

しかし、私はこれらの理由のほか、とくにわが国の西洋史学界における、国民史的立場・西ヨーロッパ中心傾向への反省の欠如をあげたい。わが国の西洋史学界の大勢

## 十字軍研究の動向と立場

は、今日でも国民史的立場をはなれていない。イギリス史、フランス史、ドイツ史、アメリカ史などの研究では、その国の人びとが理解できないほど精密な研究がなされ、極端にいえばその国の地方史家ではないかと思われるほどの研究が多くなりつつある。このような微視的研究になれた人にとっては、十字軍運動のような、いわば国のわくを越えたヨーロッパ的現象は、もっとも捉えにくいものであり、概説的展望以上に研究がすすめられないであろう。たしかに十字軍運動は一国だけの事件ではなく、「ヨーロッパ」的な事件であり、国民的視野をこえた「ヨーロッパ」的観点に立たなければ、正しく把握しにくい。National ではなく supra-national な立場が必要なのである。そのような立場は、わが国の西洋史学者の多くにとっては、けっして十分に理解されていない。それは National な立場への批判と反省が欠けているからである。

さらに、十字軍研究においては、この「ヨーロッパ」的立場をとる場合でも、いままでの「西ヨーロッパ」中心では不十分である。イスラムやビザンツの状態を無視した十字軍研究は、西ヨーロッパ人にとってはともかく、われわれの眼からすれば明らかに不十分であるだけでなく、正しい歴史的評価を下すことができるとはいえない。西ヨーロッパ・ビザンツ・イスラムをふくむ、より広い立場に立つ必要がある。(のちにのべるように、このような立場が主張されるに至るのは、ヨーロッパの学界においても、とくに第二次大戦後のことである。)

私はもちろん十字軍研究の専門家ではないが、National な立場をこえてヨーロッパ史を見直す必要を痛感するものとして、十字軍運動には深い関心をもっており、わが国における十字軍研究の進展に少しでも役立ちうればと考えて、あえて専門外にもかかわらず、十字軍研究の、それもイスラム側の研究に無知なため、もっぱら西ヨーロッパやアメリカに限定された最近の動向を紹介するにとどまる。

## II

ヨーロッパにおける十字軍研究は、十字軍そのものとともに始まったといわれる。十字軍に関係したひとびとの手による年代記、たとえば最初の十字軍史家とよばれている Guillaume de Tyr の “*Historia rerum in partibus transmarinis gestarum...*” をはじめとして、多くの記述がなされている。しかし十字軍が歴史研究の対象としてとりあげられるようになったのは、やはり 19 世紀になってからであり、とくにロマン主義運動の台頭とともに発展した中世史研究の一環としてであった。その代表的な作品は

ドイツの Wilken: *Geschichte der Kreuzzüge nach morgenländischen und abendländischen Berichten*, 7 Bde., 1807-32 とフランスの Michaud: *Histoire des Croissades*, 1812-17 であろう。これらの著作はヨーロッパ側の史料だけでなく、多くはないにしてもアラビア史料（ヨーロッパ語訳された）も用いている。

だが十字軍研究が本格的に展開するためには、根本史料の蒐集・整理・公刊が必要なことはいうまでもない。この事業はかなり古く 17 世紀末から始まっているが、18 世紀にはとくに St. Maur のベネディクト派の修道士たち (Mauristes) によって遂行された。この困難な事業を一応完成し、十字軍の科学的な研究の基礎をきずいたのは、1841 年からの *Recueil des Historiens des Croissades* の公刊である。この史料集は A) *Historiens Occidentaux* (5 vols., 1844~95), B) *Lois* (2 vols., 1841-43), C) *Historiens Orientaux* (5 vols., 1872-1906), D) *Historiens Grecs* (2 vols., 1875-81), E) *Documents Arméniens* (2 vols., 1869, 1906) の 5 部に分れ、西ヨーロッパ側の史料だけでなく、アラビア史料（フランス語訳）、ビザンツ史料なども含むもので、史料批判の点では若干の欠陥（とくにアラビア史料において）があるにしても、十字軍研究には不可欠なものとされている。なお前述の Michaud の著作の補足として公刊された *Bibliothèque des Croissades* (4 vols., 1829) もまたフランス・イタリア・イギリス・ドイツ・北欧諸国の年代記だけでなく、ギリシア・トルコ・アラビア（フランス語訳）の年代記をも含む重要な史料であり、今日でもなお研究の出発点としてかなり使用されている。

これらの史料集とならんで注目すべきものに、*Société de l'Orient Latin* の活動がある。1875年に設立されたこの学会は、前述の *Recueil* よりももっと科学的な考証の上になたて、十字軍関係の史料 *Archives de l'Orient Latin* (2 vols., 1881-84) を公刊した。さらに機関誌 *Revue de l'Orient Latin* (12 vols.) に多くの論文を掲載し十字軍の専門的研究の発展に大きく寄与した。（なお十字軍に関する論文を多く掲載している雑誌には *Byzantion*, *Syria*, *Revue historique du sud-est européen*, *Journal Asiatique*, *Byzantinische Zeitschrift* などがある）。

その他19世紀末から公刊された主な史料集には、*Palestine Pilgrims' Text Society Library* (13 vols., 1890-97), *Exuviae Sacrae Constantinopolitanae* (3 vols., 1877-1904), *Bibliotheca Geographorum Arabicorum* (8 vols., 1870-94) などがある。（これらの史料集の解説が、Atiya, S. A.: *The Crusade. Historiography and Bibliography*, 1962 にある）。

## 十字軍研究の動向と立場

これらの史料集の刊行とあいまって、19世紀末から20世紀にかけて、十字軍に関する研究論文・著作が、ヨーロッパ諸国において、多数発表されるようになった。なかでもドイツとフランスが最も盛んであったが、そこには政治的な背景があったことを見逃してはならない。19世紀末、帝国主義段階に入ったドイツは、いわゆる3B政策の名のもとに、近東(西南アジア)方面に強い関心を示し、積極的にトルコに進出したが、それにとまって、この地域を舞台として展開された十字軍運動の研究もまたさかに行われるようになった。なかでも皇帝 Wilhelm II のイェルサレム訪問の年(1898)に公刊された Röhricht の *Geschichte des Königreichs Jerusalem* は、今日でもなお高く評価されているすぐれた著作である。

フランスは19世紀においても、いわゆる「東方問題」に深い関心をもっていた。先述の Michand の著作などもこのことと無関係とは思われないが、とくに第一次大戦後は、シリアの信託統治を行うことによって、十字軍研究も一層高まった。十字軍を「東方問題」の一環として、また「ヨーロッパの植民活動」の前駆としてとらえ、今日の十字軍研究の古典の一つとなっている Grousset の *Histoire des Croisades et du Royaume de Franc de Jérusalem* (3 vols., 1934-36) は、この時期のフランス人学者による十字軍研究の最高峯を示すものと考えることができる<sup>3)</sup>。

こうして今日にいたるまで、十字軍運動に関する文献は、おびただしい数にのぼり、ヨーロッパ中世史の他の分野にくらべて、それはまさに「多すぎた」ともいえようし、またそこには「悪しき歴史」が多く混じていることが、まさしくそれ自体、十字軍研究の問題の一つだともいうことができる。ここで、これらの多数の文献を整理して、十字軍研究がどのような課題を、どのように解決したかを具体的に詳細にのべる余裕も能力も、私にはない。ただここでは、いままでの十字軍研究の主要な立場と、今日でもなお未解決、未開拓でのこされている若干の問題を指摘するにとどめたい。

いままでの十字軍研究は、大きく二つの観点(立場)に分けることができよう。その一つは十字軍をもっぱら12-13世紀のヨーロッパ史の一側面としてとらえる立場である。それは十字軍運動をなによりも西ヨーロッパからの軍事的遠征と考え、またヨーロッパの社会や制度に対するその影響を問題にする。他の立場は十字軍をイスラム圏内のキリスト教徒の植民地建設運動とみなし、そこにおける東西文化の接触と混合、そこから生れた文明の研究に強い関心を示すものである。いずれにしてもこれらの立場がヨーロッパ中心的なものであることは否定できない。

これらの立場に立つおびただしい研究にもかかわらず、十字軍研究にはなお多くの未

解決・未開拓の分野がのこされているといえる。たとえば、豊かな史料の存在にもかかわらずアラビア史料の蒐集・整理は完全とはいえないし、また宗教騎士団に関する史料も不十分である。十字軍をヨーロッパ史の一側面としてとらえる立場においても、たとえば、法王と十字軍の関係、十字軍の財政的基礎などの解明にはなお多くの問題がのこされており、また軍事的遠征として十字軍をみた場合、第2回十字軍はほとんど取りあげられておらず、他の十字軍、第4、第5回、その他の小遠征についてもまだ充分とはいえない。十字軍とビザンツ帝国との関係についても<sup>4)</sup>、すぐれた研究がないわけではないが、まだまだ未開拓の分野も多く、シシリーのノルマン王国との関係についてはなお問題が残っている。とりわけ十字軍のヨーロッパに及ぼした影響については、ほとんど注目するにたる全面的総合的な成果はでていない。

十字軍をイスラム世界内のキリスト教植民としてとらえる立場にも、なお多くの問題が残されている。たとえばエルサレム王国の歴史については、比較的よく知られているが、ラテン帝国や、キプロス王国などの歴史は、まだまだ研究が必要である。シリアにおける十字軍国家とその近隣、たとえばエルサレムとシシリー、アラゴンとの関係、ラテン帝国、モレア諸国家とブルガリア人、スラブ人との関係などの問題は、あまり取りあげられていない。十字軍国家の指導者の伝記も不十分である。さらにまた十字軍国家内の諸地域や都市などの地方史や文化史は、未開拓といってよい。十字軍国家の諸制度、教会史、宗教騎士団の歴史をはじめ、経済、商業の歴史にもなお研究の余地が多く残されており、とりわけキプロス島の経済史の解明は重要な課題である。十字軍国家の社会史についてはかなり研究があるが、文化史についてはほとんどないといってよい...<sup>5)</sup>。

このように、十字軍研究は個別的専門的な研究の分野においても、なおまだ多くの解明されなければならない課題が残ってはいる。しかし私が小論において特に強調したいのは、このような特殊・個別研究課題ではなくて、十字軍運動全体をどのように意義づけるかという根本的な立場についてである。さきにものべたように、いままでの研究の立場の大部分は、西ヨーロッパ中心のなものであった。十字軍がいわば全ヨーロッパ的運動である以上、National な立場をこえた西ヨーロッパ的立場からの考察が重要な意義をもつことはいままでもない。しかし、十字軍は同時にイスラム世界と関連するものであり、イスラム的立場からの考察をぬきにしては、一面的理解に終らざるをえない。いなもっと重要なことは、ヨーロッパをこえ、イスラムをこえたより広い次元に立つ立場——それは世界史的立場といってもよい——に立つことが、十字軍運動の理解に

## 十字軍研究の動向と立場

も必要なのである。事実このようなより広い視野から十字軍運動を位置づけようとする見解が、第二次大戦後、ようやく提起されてきている。

1940年、アメリカの十字軍研究の専門家 La Monte は、「十字軍研究史の諸問題」という論文の中で<sup>6)</sup>、最近の新しい傾向として、(1) 十字軍の範囲・時代が拡大され、イスラム教徒とキリスト教徒との全闘争、スペインや、地中海における闘争だけではなく、オスマン・トルコに対する戦いをも含めようとする傾向があること、(2) また十字軍を植民的観点からみる立場においても、イスラム側からの考察を強調し、十字軍をイスラム世界の歴史の中のエピソードとして論じようとする傾向があることを指摘している。そしてかれは、その代表的な作品として Carl Erdmann の *Entstehung des Kreuzzügsgedankens* (1935) と A. S. Atiya の *Crusade in the Later Middle Ages* (1938) をあげている。Erdmann は十字軍思想、`聖戦` の理念がかなり古くから存続していたことを明らかにし、Atiya はとくに、13世紀以後の十字軍運動の重要性を主張している。

### III

第二次大戦後、公刊された十字軍研究、とりわけ通史 (General history) のなかで最も注目すべきものは、イギリスの歴史家 Runciman の *A History of the Crusades* (3 vols., 1951-54)、エジプト人 Atiya の *Crusade, Commerce and Culture* (1962)、および *Pennsylvania History of the Crusades, Vol. 1* (1955), *Vol. 2* (1961) であろう。このうち、十字軍運動の性格・範囲などに関して最も興味ある見解を提起しているのは Atiya であるが、かれの見解を述べる前に、他の二者について簡単にふれておきたい。

Runciman はビザンツ史研究家として有名であるが、かれの前掲の「十字軍史」3巻は、英文で書かれた最も浩瀚なすぐれた著作で、政治・軍事史に重点がおかれてはいるが、ビザンツ史料を多く利用した代表的な作品である<sup>7)</sup>。

十字軍運動のような、時間的にも空間的にも広い範囲にわたる、しかも人間活動のあらゆる側面に関係をもつ現象の研究が、一人の専門家によるよりも、各専門家の協力による総合的研究を必要とすることは、いうまでもない。かなり古く第二次大戦前から、アメリカの学者を中心にして、そのような総合研究の企図があったが、その成果が公刊されたのは、戦後になってからである。それが *Pennsylvania* 大学の学者を中心と

し、ヨーロッパ諸国の学者の協力のもとに出版された *A History of the Crusade* である。アメリカの学者が十字軍研究で注目すべき研究を発表しはじめるのは、20世紀以後のことであり、それは植民国家から発展したアメリカが、最も早い植民国家である十字軍国家に関心をもっていたからだともいわれている。しかし、私は第二次大戦後におけるアメリカの近東地域に対する利害関係と、今日のアメリカにおける十字軍研究の発展との間には、かつてのドイツ・フランスのそれと同じ関係が存在していると考えたい。それはともかく、この Pennsylvania 大学を中心とした「十字軍史」は、全5巻の予定で、第1巻 *The First Hundred Years* (1958) は、第一回十字軍の開始(1095)前の西ヨーロッパ、地中海周辺、イスラム世界の諸状況から1189年のエルサレムの陥落までをふくむ諸論文からなっている。第2巻 *The Later Crusades, 1189-1311* (1961)、第3巻 *The Fourteenth and Fifteenth Centuries*、第4巻 *Civilization and Institutions*、第5巻 *Influence and Consequences, with Genealogies and Bibliographies* として全巻公刊されると、おそらく最も完備した十字軍史となるであろう。

これらの著作以上に、十字軍運動の把握に興味ある新しい概念を提起しているのは Atiya である。かれは自己の見解を短い論文 “*The Crusades: old ideas and new conception*” (*Journal of World History*, II.) の中に提示しているが、それをより詳しく発展させたのが、*Crusade, Commerce and Culture*, 1962 である。以下すこしく、かれの提起した新しい十字軍運動の概念を紹介しよう。

十字軍運動は、ヨーロッパ史の上では、ふつう 1095 年の第1回十字軍からはじまり、エルサレム王国などの、いわゆる十字軍諸国家の建設、これらの諸国家の維持、近接のイスラム勢力との抗争、それに関係しての第2回以後数回にわたる遠征をへて、1291年のアッコンの陥落によるエルサレム王国の滅亡で終る、キリスト教徒対イスラム教徒の武力抗争と考えられている。その性格についても、古くは、地上における神の代理(法王)によって指導された「神の意志」(摂理)の実現としての「聖戦」として、あるいは武装した「集団的巡礼」(*passagium generale*)として考えられたり、または逆に、中世的狂信のあらわれ、中世精神の頑迷さを示すものともみなされた。

しかし、19世紀末以後の研究では、十字軍をば西方から東方への「民族移動」——その中心はノルマン人やフランス人——とみなしたり、一種の「植民運動」として、近代のヨーロッパの植民活動の前駆をなすものとして、ヨーロッパの膨張の一段階と考えた

## 十字軍研究の動向と立場

りしている。これらの十字軍解釈については、ここで詳しくのべる余裕はないが、前述の Grousset の大著以来注目される一つの傾向は、十字軍運動を東と西との関係・抗争——かれはこれを「東方問題」 Question d'Orient とよんでいる——の一章として位置づける解釈が支配的になりつつあることである。

東と西との対立抗争としての「東方問題」は、古くペルシア対ギリシアの抗争にみられるが、その中核をなすものは人種・文化抗争であり、その一応の解決がアレクサンドロスの東征とヘレニズムの成立とみることができる。

中世における「東方問題」の第一は、ビザンツ帝国とペルシア帝国との抗争であり、614 年ペルシア軍がシリアに侵入し、イェルサレムを占領したのに対し、ビザンツ皇帝 Heraclius (610-41) は、630 年その奪回に成功した。Grousset はこれをいわば最初の十字軍とみているが、この見解は、十字軍年代記の最初の作者 Guillaume de Tyr が採用した古い見解の復活ともいえる。ここでの東方問題のビザンツ的解決は成功したといえる。

次の「東方問題」はビザンツ対イスラム（アラビア勢力）との抗争である。シリア回復後 10 年たらずしてイスラム勢力によって再びシリアを奪取されたビザンツは、以後イスラム勢力との抗争をつづけ、673 年と 717 年の二度首都 コンスタンチノーブルを包囲された。幸いに首都の陥落は免れたとはいえ、小アジア・シリア領有をめぐる両者の抗争が展開した。皇帝 Basil II (976-1025) は、イスラムと休戦条約をむすび、北シリアを確保して、聖地の現状維持をみとめさせたが、イェルサレムの奪回はならなかった。その後セルジューク・トルコの抬頭まで、この状態に大きな変化はなかった。したがって、ここでの「東方問題」のビザンツ的解決は不成功に終わったといえる。「東方問題」の一環として十字軍運動を考えると、したがって、以上の諸運動はいわば「前十字軍」運動とみなすことができ、この点からも、いわゆる十字軍運動の開始を 1095 年以前にまでさかのぼることができよう。

十字軍運動の開始をこのように古く遡る傾向とならんで、終末を 1292 年よりもさらに約一世紀ひきさげ、14 世紀を通じて十字軍運動——「後期十字軍 Later Crusade」——の展開を主張する傾向が強調されつつある。それによると、イェルサレム王国の滅亡以後、14 世紀においては、ヨーロッパにおいて十字軍精神を鼓吹する宣伝文書が多く出され、世紀の後半には、十字軍的遠征が数度試みられた。たとえば、1344 年のエーゲ十字軍——法王 Clemens VII 指導下に、Hospital 宗教騎士団を中心とし、トル



コよりスミルナ Smyrna を奪取。1345 年の Humbert II の十字軍、1361—62 年のキプロス王による十字軍、さらには 1390 年のフランス・ジェノア人によるチュニス遠征十字軍などがあるが、その最大のもは 1396 年のニコポリス Nicopolis 十字軍である。10万に近いキリスト教軍は、トルコ軍のために完敗した。この戦の後、十字軍を叫ぶものはあっても、ヨーロッパ側からの遠征はこころみられず、これに反して、オスマン・トルコがヨーロッパ国際関係の舞台に登場する契機となった。この意味で 1396 年のニコポリス十字軍が最後の十字軍運動といえよう<sup>87)</sup>。

東と西との関係、「東方問題」の一環としての十字軍——それは中世東方問題のフランス的解決のこころみ——は失敗に終わったが、さらに注目すべきことは、これに対するイスラム側からの反作用である。これを反十字軍運動 (Counter-Crusade) と規定し、十字軍運動にひろく含めて考える学者がある<sup>89)</sup>。「反十字軍」という概念はおそらく「反宗教改革」(Counter-Reformation) の概念からの類推であろうが、われわれとして注目されるのは、それがイスラム史における十字軍の問題にかかわる点である。イスラム側よりする、いわゆる十字軍研究、ヨーロッパの観点からではなくイスラム的観点からの十字軍研究は、今日まだ十分に行われていないとはいえ、すでにその若干の展望は提起されている。イスラム史において、いわゆる十字軍がどのように位置づけられているかは、私はよく知らないが、たとえば、Cahen などは最も注目すべき学者の一人ではないかと思う<sup>10)</sup>。

「反十字軍」運動研究の必要性を主張する Atiya によると、この運動は、第 1 回十字軍の時のモスルにおける Zanki 家の抬頭、Saladin によるイェルサレムの陥落 (1187)、ついでイェルサレム王国の滅亡 (1292) をへ、14-15 世紀を通じて強力に展開された。この最後の反十字軍運動は、エジプトとトルコの二つを中心にして展開し、前者の例としては、1374 年のアルメニア攻撃、1424-26 年の三回にわたるキプロス島遠征、1440、43、44 年のロードス島遠征があり、後者の例としては、いうまでもなくオスマン・トルコの東ヨーロッパ進出がある。これはいわば「東方問題」のトルコ的解決の試みであり、その第一は、先述のニコポリスの戦である。モンゴル勢力 (ティムール) の出現によって一時阻止されたとはいえ、トルコの進出はつづき、1453 年ビザンツの首都コンスタンチノーブルの陥落にまで発展した。この反十字軍運動が停止したのは、1529 年のウィーン包囲、1572 年のレパントの海戦においてである。

十字軍運動に関連して考えなければならない問題は、同じくキリスト教とはいえ、これが決して東方のギリシア正教徒に良い結果をもたらさなかったことである。さらにまた

## 十字軍研究の動向と立場

十字軍運動とモンゴル勢力との関係も無視しえない。よく知られているように、13世紀以後の法王によるモンゴル宮廷への使節の派遣は、対イスラム同盟を企図したものであった。この同盟は実現されなかったにしても、15世紀末のコロンブスの航海をイサベラが特許した目的の一つに、このような対イスラム＝十字軍的動機があったことは否定できない。このように考えるとき、15世紀末のいわゆる地理上の発見は、十字軍運動の間接的な結果であり、その延長として考えられよう<sup>11)</sup>。

専門外であるにもかかわらず私が十字軍運動の研究についてのべたのは、最初にあげたわが国における研究の不毛性からであった。そして私は、今までのこの不毛性こそ、かえって、わが国における十字軍運動研究が西ヨーロッパやイスラムとはちがって、いわばその宗教的偏見にとらわれることのない客観的な、そして真に世界史的な立場をとりえることができるのではないかと思う。十字軍研究が困難なことはいうまでもないが、これこそ、わが国の西南アジア史研究に課せられた重要な課題の一つではなからうか。

(1965. 3.)

(筆者は京都大学文学部教授)

## 註

- 1) ヨーロッパにおける十字軍研究文献目録として比較的最近のものは、Mayer, H. E.: *Bibliographie zur Geschichte der Kreuzzüge*, München, 1960; Atiya, A. S.: *The Crusade: Historiography and Bibliography*, 1962 があり、これらを見れば、いかに十字軍に関する研究がおびただしいかが分る。
- 2) わが国における十字軍研究の論文としては、私の知るかぎりでは、山中謙二：「東西交渉史上における十字軍の意義」(史学会篇：『東西交渉史論』上，昭14)のほかには、グルッセの訳書『十字軍』(クセジュ文庫，橋口訳，1954)があるだけである。宮崎博士の著書『菩薩蛮記』(昭，19)の中の「西アジア史展望」の一章「十字軍」は、いわばイスラム側から見たものとして、注目されよう。
- 3) cf. Boase: "Recent Developments in Crusading Historiography" (*History*, XXII, 1937), pp. 110-25.
- 4) ビザンツとの関係を論じた最近の研究としては、Lemerle: "Byzance et la croisade" (*Relazioni del X Congresso Internazionale di Scienze Storiche*, Vol. III, 1955) pp. 595-620 がある。なおこの巻には、L'idee de Croisade として、Cahen: *L'Islam et la Croisade*, Runciman: *The Decline of the crusading idea* など6篇の論文がある。

- 5) cf. LaMonte: "Some Problems of Crusading Historiography" (*Speculum*, XV, 1940), pp. 57-75.
- 6) *ibid.*
- 7) cf. Vercauteren: "Rapport général sur les travaux d'histoire du moyen âge de 1945 à 1954" (*Relazioni del X Congresso Internazionale di Scienze Storiche*, Vol. VI, p. 158).
- 8) これらの後期十字軍、とくに Nicopolis 十字軍については、Atiya: *The Crusade of Nicopolis*, 1934; *The Crusades in the Later Middle Ages*, 1938 参照。
- 9) Atiya: *Crusade, Commerce and Culture*, pp. 120 ff. 参照。
- 10) Cahen: "L'Islam et la croisade" (*Relazioni di X Congresso*....Vol. III). かれはこの報告の中で、次の見地から十字軍を考察することを主張している。1) 十字軍の起源と近東の状態との関係、2) キリスト教的十字軍概念とイスラムの聖戦の概念との類似と差異、3) 東方の人びとは十字軍をどのように理解したか、4) 十字軍思想が東方世界に与えた反響。このうち第1の問題については、かれの論文 "An Introduction to the First Crusade" (*Past and Present*, no. 6, 1954) で答えている。なおイスラム側より十字軍の最近の研究としては、Gibb: "The Achievement of Saladin" (*Bulletin of the John Rylands Library*, 1952) や、前掲の Pennsylvania の「十字軍史」の論文がある。また Cahen の未刊の *Autour des Croisades, points de vue d'Orient et d'Occident* が期待される。
- 11) 拙稿: 「いわゆる新大陸・新航路発見の歴史的意義について」(『立命館論双』14, 昭 18) 参照。

追記 最近私は一つの興味ある論文を読む機会をえた。それは Hodgson, M.: "The Interrelations of Societies in History" (*Comparative Studies in Society and History*, Vol V., no. 2, 1963) である。この論文は十字軍研究に直接関係するものではないが、私が十字軍運動の理解に必要なものとして指摘した(p. 105-6)世界史的立場にかかわるものとして、示唆にとんだ見解を提出している。かれの論点の一つは、West 対 East,あるいは Occident 対 Orient という概念も、East を一つの世界とみなして、この世界のもつ多様性を否定している点で、やはり West 中心の考え方であると主張する。かれによれば太平洋岸から大西洋岸にいたる北半球の地帯は、Afro-Eurasian 地域として、一つの大きな歴史的世界を構成し、その中に4つの主要な文化核地域 core-area——ヨーロッパ、中東、インド、極東(中国・日本)——があり、これらの相互関連 interrelations によって、この大きな歴史的世界の歴史が構成される。

この見解によると、十字軍運動を東と西との抗争(東方問題)の歴史の一環としてと

## 十字軍研究の動向と立場

られる見解も、まだヨーロッパ的・西方中心の見解を脱却せず、世界史的立場とはいえないことになる。より大きな Afro-Eurasian zone の歴史の中の、ヨーロッパ対中東の一つの抗争として十字軍運動をとらえ、全体の相互連関性の中にそれを位置づける立場こそ、今日の段階での世界史的立場ということになる。

こう考えてくると、十字軍研究の道は、一方でますます研究対象が細分化されてゆくとともに、他方では、運動そのものを、ますます大きな展望の中に位置づける立場が要請されてきつつあるといえる。この意味で、私はわが国の東洋史・西洋史・西南アジア史研究者の協力によって、わが国における独自の十字軍研究の発展を期待するものである。

(1965. 6.)